

## 顏延之論

——阮籍受容の顏延之的意味について——

大 上 正 美

當代に於いて謝靈運と並稱された劉宋初の文學者顏延之（字は延年。三八四～四五六）なる存在は、「顏謝」からやがては「陶謝」へとつてかわる文學史の裁斷に象徴されるように、南朝文學の否定的評價——修辭技巧に過度に傾斜してゆく文學を代表する詩人、と言うに過ぎぬ存在なのであろうか。

顏延之の没後、晩年の若き友人王僧達は、「爵を帝典に服し、志を雲阿に棲まし」めた延之を稱えた（祭顏光祿文）。爵すなわち現實の生（處世）の次元と、志すなわち文學の次元との乖離を生きた、換言すれば現實と文學の二元論の構圖そのものを生きおとした點を高く評價した。だが果してそれにとどまるか。以下にその二元論なるものの再検討から、しからば延之の獨自性とは何か、その獨自性は文學の流れに於いてどういう存在意義があるのか、を論ずるのが本論の目的である。

詩文にうかがえる顏延之の生涯に於ける主題は、自己と世間との關係性にある。概ねそれは、雅才あるが故に世間と相容れぬ自己が、ではどう身を處して生きてゆけばよいのか、という關心である。眞に才ある者は必ずや世に軋れ出る。「玉水方流を記し、璇源圓折を載す。寶を蓄へて毎に希聲あり、祕すと雖も猶影徹す。」（贈王太常）しかし世間はあくまで俗でしかなく、才士はついには世と相容れない存在であることも苦い事實としてある。「陶徵士誄」に述べる幽居者陶淵明への深い共感始終その觀點からである。「夫れ璿玉は美を致すも、池隍の寶と爲らず。桂椒は芳しきを信ぶるも、園林の實に非ず。豈に其の深くして遠きを好まんや。蓋し云に性を殊にするのみ。」また、「道は物に偶はず」ともいう。

その詩文に於いては「祭屈原文」とか「五君詠」とかを

例外として、世俗への痛罵はその生涯に於ける言動ほど露骨でない。しかし、この俗世で祿を食む生き方を非とする認識を、延之は若い頃からずっと持ち續けていたのである。出世作「北使洛」の末尾は「蓬心既に已ぬるかな、飛薄して殊に亦然らん」と結ぶ。「蓬心」とは『莊子』逍遙遊篇に典故を持つ語だが、ここでは自身を否定的に把握するのに使用している。王僧達の言を借りれば「爵を帝典に服するも、志を雲阿に棲ましむ」のだとする現實への關與である。つまり、現實の生よりも優位のものとして志があるのだ、とする二元論を生きる。それも、「陰風 涼野に振ひ、飛雪 窮天に瞥し」などの詩句から、北方の風土とか旅愁とか以上に延之の暗い心象風景を認める目を持つなら、もはやその關わり方は屈折した現實參加の姿勢と言うべきである。従って、「爵を帝典に服す」る生き方をきっぱりと捨て去ることがない以上、絶えず志なるものへの先驗的共感、もしくは志なるものへの負い目を持つた構造にならざるを得ないのである。<sup>(注②)</sup>

## 二

顏延之の場合、單なる二元論の構圖を示すにとどまらず、志が現實の生よりも優位のものとして存在するのだと

いう一貫した傾き（志に對する負い目）を持つて、しかもなおその乖離自體を生きるのだが、さらに注意すべきは、その二元論がそれぞれに於いても決して單純ではなく、その内に二重性を有した複合的の二元論である點である。

### 二の1

延之の生涯に明らかなのは、「偏激」（宋書本傳）と評される激しい生きざまと、遠識を持つた慎重な處世という相反する二面である。明の張溥は「世を玩ぶは阮籍の如く、善く對するは樂廣の如し」（漢魏六朝百三名家集題辭）という。阮籍と樂廣を引合いに出す妥當性は後にふれるとして、ここにいう「玩世」と「善對」は、延之の生涯を通しての處世に於ける相反する二面を言い當てている。

三十歳にして獨身、姻戚關係にある有力者劉穆之の推薦を無視、仕官後の傅亮との激しい競争心、劉義眞の寵愛への過度の苛擔、そこでの謝靈運をも含めた氣ままで野心剥き出しの日々、徐羨之たちへの反撥、始安太守左遷、赴任途次の陶淵明との痛飲、「祭屈原文」の制作、徐羨之ら誅殺後文帝の下での劉湛や殷景仁ら權力の中樞との對立、永嘉太守左遷時の「五君詠」制作。今延之の生涯を元嘉十一年（五十一歳）永嘉太守左遷、それに續く七年間の屏居生活<sup>(注③)</sup>をはさんで前後に分つなら、右に見た前半生の數々の俗

世への反撥は、確かに自己の才能への過度の信頼から來た  
偏激のようである。しかし同時に、激しい自己主張の背後  
にある慎重な處世態度も見逃してはならない。例えば、起  
官前劉穆之の推薦を拒否したことは、時の劉裕派對劉毅派  
の争いから距離をおこうとした行爲なのであつた。<sup>(注④)</sup>政治的  
配慮から起官に慎重な結果、逆に、後にかつて起官した劉  
柳の子劉湛に向つて「吾が名器の升らざるは、當に卿が家  
吏と作るに由るべし」などの捨てぜりふを吐かせることに  
もなるのである（本傳）。また「早服のころ身の義は重く、  
晩達しては生の戒輕し」（拜陵廟作）と告白する詩句もあ  
る。この若い頃から處世に關して自己制御が極度に強いこ  
とは、延之に特徴的なことである。<sup>(注⑤)</sup>

ただその慎重なる處世も前半生に於いては、偏激と慎重  
のバランスがくずれ、概ね偏激とならざるを得ないよう  
だ。それは、信頼するに足る現實の側から期待を持つて強  
く働きかけてきたとき、しばしば露呈する。延之にはその  
働きかけに過度に傾く姿勢がある。劉義眞との關係がそう  
である。そこに示された自己實現の激しさは、『宋書』の  
指摘する傅亮との確執だけでなく、劉義眞の寵愛への過度  
の苛擔、それ故の政治的卷きぞえの結果であつた。また文  
帝との關係にも言える。徐羨之や傅亮の誅殺後中書侍郎と

して召された延之は、次にみるように心では隱遁を願いな  
がらも、出仕するや文帝の下で謝靈運とのライバル意識剥  
き出しの、文士としての得意の絶頂にいた。<sup>(注⑥)</sup>しかしやがて  
それが片思いでしかないと知らされてゆくにつれ、その失  
望と幻滅が權力の中樞の劉湛や殷景仁へ向けての激しい痛  
罵となる。以上のように、大きな期待を身に感ずる喜びが  
現實には幻想でしかなかった幻滅、それが延之の挫折のあ  
りようを示すのである。従つて現實の前で自己が自己であ  
り得ぬバランスをくずしたとき、延之の歸つてゆく地點  
は、やはり「蓬心既に已んぬるかな」の負なる自己を抱い  
た現實參加であつた。そのことをよく示しているのは、  
「始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作」詩である。高みから  
長江一帶の壯大な風景を眺望することによつて自己を取り  
もどしながら、詩の後半は、

清氣霽岳陽	清氣	岳陽に霽れ
曾暉薄瀾澳	曾暉	瀾澳に薄る
悽矣自遠風	悽	しきかな
傷哉千里目	傷	しきかな
萬古陳往還	萬古	往還を陳じ
百代勞起伏	百代	起伏を勞す
存沒竟何人	存沒	するは竟に何人ぞ

遠きよりふく風

炯介在明淑 炯介 明淑にこそ在れ

請從上世人 請ふ 上世の人に從ひ

歸來藝桑竹 歸來して桑竹を藝ふんことを

と歌う。末尾を隱遁への願いで結びながら、事實としてなおも都で官途につこうとする自己矛盾、それが全體的視野を獲得したとき感傷となつて己にひたひたと攻め寄せる。遠くから吹き寄せる風にじつと身をあずける感傷の質は、志に對する負い目を抱いて現實參加する構造に由來するものである。

やがて延之は五十一歳頃から屏居生活に入る。時に宮廷詩人として出向くことはあつても「人間に豫<sup>かは</sup>らざること七載」(本傳)から、再び官途につく後半生に於いて、偏激と遠識の二面性は、前半生と比較にならぬほど極端に奔る。『宋書』『南史』の本傳に載す數々の奇行と放言のうち、とりわけ目につくのは飲酒に關するものである。しかしそれらの奇行が前半生の激しい生きざまと微妙に異なるのは、その激しさが現實の場での挫折を経験しない、きつかけのない激しさである一點である。しかも過度の激しさなのである。そのため前半生にあつた挫折の悲劇性よりもかえつて喜劇性として目に映る。それは、比較的安定期をむかえた元嘉の治世に於ける宮廷詩人という自己の位置

に前半生ほど期待しなくなつたためであらう。それにしても「軫を歸するに崎傾を慎まん」(拜陵廟作)と言いながら、なぜに喜劇的にならざるを得ないのか。喜劇的に生きぬく姿に延之の荒れすさんだ心を想い見なければなるまい。

一方慎重なる處世は、息子の顔竣との關係に代表される。元嘉三十年文帝を弑した皇太子劼から、孝武帝の下で檄文を草した竣のことを詰問されたとき、「竣は尙ほ老父すら顧みざるに、何ぞ能く陛下の爲にせん」と答えて難を免れた(本傳)。張溥が「善く對するは樂廣の如し」としたのは、樂廣が長沙王から、娘を嫁がせた成都王との關係を詰問されたとき、「豈に五男を以て一女に易へんや」と答えた話(世說新語言語篇)に擬したのである。しかし顔竣との關係はそれにとどまらない。その最たるものが、權力の座についた竣から援助を受けようとせず、「竣が鹵簿に逢へば、即ち屏きて道の側に往く」話(本傳)である。こうなればもはや遠識どころではない。

このように後半生には偏激と遠識のバランスはくずれない。が、兩者はますますそれぞれに過度に極端化する傾向にあるのである。

次に表現の次元の複合性について詩に限りみると、ここでも現實との關係に於いて二重性を持つ。いわゆる「侍宴」の詩と、「五君詠」もしくは「北使洛」の詩とに關してである。

江淹は「雜體詩」三十首の中で延之を模擬するに「侍宴」とする。「應詔觀北湖田收」「車駕幸京口侍遊蒜山」「車駕幸京口三月三日侍遊曲阿後湖」などの侍宴詩は、宋室から恩顧を受けながら、そこでの自己はひたすら恥入る存在でしかない、という關係をくずさない。

途泰命屯 恩充報屈 有悔可悛 滯瑕難拂

くにの途は泰んずるもわが命は屯めり、てんしの思は充つるもわが報いは屈しぬ。悔い有りて悛むべきも、わが滯瑕あるみはいかんとも拂ひ難し。(應詔燕曲水作詩)形式として宋室讚美と自己卑下が先驗的に存在するもので、現實を生きる自己のあるべき姿を問うことはない。従つて現實と自己との關係を問う構造を缺いた作品群と言つてよい。侍宴詩が特に後半生に多いことは、後半生の生き方からうなずけよう。

他方、鍾嶸(詩品序)が五言の警策の一つにあげる「北使洛」と、張溥(題辭)や清の沈德潛(古詩源)が推す「五君詠」とは、現實を生きる自己のあるべき姿を問う詩であ

る。その問い方は現實をつくりかえてしまうほどに強烈な陶淵明や謝靈運の前では色褪せてみえるが、しかし單なる現實密着の詩でもない。現實に入りこまんとして詩を書き、現實に入りこめないときに詩を書く。前者は「北使洛」であり、後者は「五君詠」であるが、ともに自身は現實を認めない、現實に身をおく自分を根柢では認めない、とする構造をここでもつねに引き摺つていたのである。

### 三

では、二重性をそれぞれの内にはらんだ文學と現實の複合的・二元論それ自體を負い目を抱きながら生きる顔延之の、さらなる獨自性は何か。ここで延之が阮籍を深く受容していたことの意味を考えたい。なるほどその詩は鍾嶸から陸機を源とすると言われる(詩品中品)ように、延之にとつて阮籍なる存在が詩人として大きな位置にあるかどうか疑問が残る。「詠懷詩」に初めて注しながら、そのキーワードを詩文に使用することに積極的でない。また、思想的に嵇康との類似を説く人も居られる。しかしその生涯を考へるならば、張溥が「世を遊ぶこと阮籍の如し」と言つたように、その反俗の激しい生きざまはまさに阮籍その人を髣髴させる。

「五君詠」の成立事情は前にふれた。自己を受け容れない醜い現實に對して激しい憤懣をぶちまけるに、阮籍たち竹林の名士を持ち出したのである。この行爲を支える阮籍理解は、阮籍の韜晦の背後には權力争いの渦巻く政治的現實があつたとするものである。この理解自体は當時に於いてそれほど目新しいものでもない。例えば「阮籍は胸中に壘塊あり。故に酒を須<sup>す</sup>ちて之を澆<sup>そそ</sup>ぐ」とする王忱の見解（世説新語任誕篇）など東晉にあることはある。しかし、自己の行爲に激しく關わらせて阮籍を持ち出すのは、阮籍受容の深化と新しい展開を示すものである。それはやがて江淹の「效阮公詩」十五首へ引き繼がれてゆく。さらに「詠懷詩」自体をも背後の現實との關係の上に位置づける理解も、後に影響が大きい。「阮籍は晉の文（王）の代に在りて常に禍患を慮る。故に此の詠を發するのみ。」（文選李善注引）もつともそれは、「其の志を言ふを怯<sup>おそ</sup>く」（詩品上品阮籍評引）もので、個々の時事を詩句の裏に讀みとる注のつけ方でなく、現實との關係をはつきり踏まえた上で阮籍の内面に思いを寄せる類のものであつたらしい。この「詠懷詩」に對する基本姿勢は、鍾嶸にも李善にも受け繼がれているのである。だが、實は阮籍受容の意味はそれだけにとどまらない。

#### 阮步兵

阮公雖淪迹 阮公は迹を淪すと雖も  
識密鑒亦洞 識は密に鑒も亦洞し

沈醉似埋照 沈醉は照を埋むるに似て

寓辭類託諷 寓辭は諷を託するに類す

長嘯若懷人 長嘯して人を懷ふが若く

越禮自驚衆 禮を越えて自ら衆を驚かす

物故不可論 物故は論すべからざるも

途窮能無慟 途窮まれば能く慟む無からんや

「阮步兵」は、他の四君と異なり、各句に於いてそれぞれ喚起される多様な逸話から、阮籍の複雑な全體像を把握せんと試みる詩である。激しい生きざまを示す沈醉・越禮・途窮と、慎重な處世を示す淪迹・識鑒・物故不可論とを二つの軸に、さらに寓辭・長嘯とをも含む複雑な人間性を、複雑なままに全體的に提示している。

今簡単に他の四君詠と比較してみると、嵇康は、「中散は世に偶せず、本自ら霞を餐ふ人」として俗世から超絶するが故に「鸞翮時に鍛がるる有るも、龍性は誰か能く馴さん」と歌う。そこには嵇康の主體の難しさ（例えば「與山巨源絕交書」で告白する「阮嗣宗は口に人の過を論ぜず。吾毎に之を師とするも、而も未だ及ぶ能はず」といった内

面の苦悶」はない。あるのは俗世への直截的で激しい批判である。かつて殷景仁から延之自身「二始」と準えられた阮咸に對しては、荀勗とのやりとりで有名な「達音」の人としての面から把握される。その「青雲の器」たる阮咸を俗世は充分に評價できず、山濤から「屢しば薦されども官に入れられず、(荀勗のために)一麾されて乃ち出でて守たり」と言う。激しくライバル視した傅亮に恨まれ始末へ出された一回目の挫折、そしてまた荀立しげに罵倒した劉湛や殷景仁から恨まれ永嘉に出されたこのたびの挫折、その口吻には、彼ら俗物を荀勗に自身を阮咸に擬す苦々しく切なる自己投影が見られる。が、自己主張と俗世罵倒の姿勢を打ち出すのに勢一杯で、それだけに「阮步兵」のような現實との複雑な關係を生きぬく主體の複雑さからは遠い。もつぱら酒をめぐる逸話でくるまれた劉伶に關しては、「精を頼みて日々に沈飲す、誰か荒宴に非ざるを知らん」とし、その沈飲にはそれ相當のわけがあつたのだと言う。外面的な奇行のみが先走る劉伶の背後の、どうにもならぬ政治的情況を暗示させる言い方である。つまり、阮籍と同じ次元まで持ち上げようとする、劉伶評價としては新しい見解を示している。向秀については莊子注を評價し、今は亡き呂安と嵇康を追想する向秀の孤立に共感する。以

上四君の何れもが、阮籍と同じく、困難な政治的現實を生きた彼らの苦しみと正當性を激しく共有していた。<sup>(注⑨)</sup>しかし、現實との緊張關係そのものに身をおくが故に強いられ、複雑な人間性を描き出している點、「阮步兵」は他の四詩と趣を異にしている。それは阮籍そのものの複雑さによって來すると同時に、矛盾する全體像を全體像として理解せんとする延之の阮籍理解の深さと苦悶とを物語るものである。

さらに注意すべきは、沈約も延之の自己告白の一つにあげる結びの「途窮まれば能く慟む無からんや」である。複雑な人間像を單に總體的に提示するだけでなく、そういう全體像を「慟哭」という一點で照射する。その結果、阮籍受容は立體的な深みを與えられ、阮籍の生きた時間が内在化したと言える。確かに張溥の持ち出した「玩世」と「善對」の二面性は(そこで張溥は阮世に阮籍を持ち出したが、それにとどまらず)そつくりそのまま阮籍の二面性に他ならなかつた。<sup>(注⑩)</sup>それをさらに「慟哭」という苦しみを生きる時間の内面的理解で共有した。延之のこの阮籍受容の苦悶のさまとへその緒のつかみ方を評價するために、以下に延之までの阮籍理解のありようを駆け足であるがみておかねばならない。

先ず阮籍と同時代の魏晉の交代期に於いて、嵇康たち竹林の七賢以外の者たちはどう阮籍を見ていたか。阮籍を方外者とし俗中を生きる自己とは異次元の存在とする、裴楷の見方が典型的であつた。母の死をめぐる話のうちの一つ、裴楷の弔問に對する阮籍の禮にかなわぬ應待を、裴楷は「阮は方外の人なるが故に禮制を崇ばず。我が輩は俗中の人なるが故に儀軌を以て自居するなり」と言う（世說新語任誕篇）。この言は、『莊子』大宗師篇の「孔子曰はく、彼は方の外に遊ぶ者なり。而して丘は方の内に遊ぶ者なり」を踏まえる。方外の人間を認める口吻の裏に、方外の者と何ら抵觸しない自らの生き方に對する自負が讀みとれる。方内と方外と設定することによって、俗中の人たる自己の存在を頑と信じて疑わないのである。そして裴楷の言のように、方内から見て方外の者が自己の存在に何ら關わらぬとき、各人は度量の大きさを誇示しさえする。例えば時の權力者司馬昭の「至愼」という阮籍評價も、その點抜きには考えられない。當の阮籍も方内に害なき存在として韜晦する。従つて權力者の庇護の一面では、方内の者からは害ある存在か否かを絶えず試められているのであり、鍾會とか何曾とかもそういう役割りを擔つた存在でしかない。方内にとつて無害であれば、方外者として認めてや

る。勿論方外の人阮籍自身は、壓倒的に優位にある方内から絶えず脅かされる危機領域で韜晦し辛うじて生を全うし得たのである。この點がその緊張關係に耐えきれぬ（もしくはそういう構造を見極めることに耐えきれぬ）嵇康と、遠識という點に關して距離のあるところである。

ところが西晉末から東晉にかけて、方外と方内という範疇はすべて方内にとりこまれ、方外者の存在がもはや意味をなさなくなつた。阮籍たちを方外として追いやるのでなく、方内の方へ引き摺りこむやり方が有力となる。つまり、方内との緊張を缺いた阮籍亞流者たちの横行とそれへの批判、さらにはその批判を支える方内に於いても方外たる自由を持ち得るとする認識が大勢を占めるのである。

王平子・胡毋彥國、諸人皆以任放爲達、或有裸體者。  
樂廣笑曰、名教中自有樂地、何爲乃爾也。

（世說新語德行篇）

劉孝標注に引く王隱の『晉書』によると、王澄（平子）や胡毋輔之（彥國）の他、「貴游子弟」の阮瞻・謝鯤たちが、「籍を祖述」して通とか達とか呼ばれたという。こういう阮籍亞流者への批判言辭によく使われる「貴游子弟」という言い方の中に若氣の至りの要素が強く、彼らの後半生は比較的平穩である。さらに亞流者横行の事實以上にここで



重要なのは、名教の中にも放達たり得るとする亞流者批判を支える樂廣の認識である。そこにはもはや方外對方内の對立はない。嵇康が使用した「能く名教を越えて自然の任にす」(釋私論)という意味の、名教(儒教)すなわち方内との對立の彼岸にある自由、という一點はそっくり捨象されてしまつていと言つてよい。この點に關しては、嵇康や阮籍の後繼者として王導が評價されたり(世說新語言語篇)、謝安などの存在が現實との緊張を全く缺落させることによって逆に風流名士として理想化されていく世相からも充分納得がいく。そこに疑義をはさむものがない譯ではない。少し觀點は違うが、例えば謝萬は「八賢論」を著し、漁父・季主・楚老・孫登のごとき「處る者を以て優と爲し」、屈原・賈誼・龔勝・嵇康のごとき「出づる者を劣と爲す」論を立てたこともあつた。しかし孫綽は、「禮玄識遠なる者、出處歸を同じくす」と反對した(世說新語文學篇注引・何法盛『中興書』)。孫綽は時に許詢と並稱された(詩品中品)が、孫綽自身の言を借りれば、許詢のよさは「高情遠致」なる脱俗にあるが、自分は「一吟一詠」すなわち文才に關してはよりすぐれるとする(世說新語品藻篇)。方内が方外の自由を持ち得る見解、つまり方外が方内との緊張を捨て方内に居心地よい位置を占めるだけで

なく、この孫綽の見解のごとく、方内に居る自己を正當化するに文才を持ち出すやり方は注目に値するものである。

さて今や時代は宋代に入り、顔延之はまさに右に述べた東晉の情況を所與のものとして生きた。王僧達の「爵を帝典に服し、志を雲阿に棲ましむ」という評價は、現實(方内)と志(方外)の緊張をそっくり缺落させた、特に孫綽の持ち出した文才ある者の自己正當化を繼承する評價であつた。しかし延之その人は、終始志に對する負い目——方外と方内の緊張を缺落させて生きていることに居心地の惡さを抱いていた。そういう負い目を持つて、しかも爵を帝典に服して生きた。この延之の生涯を想うとき、複雑な阮籍の全體像をまさに「慟哭」の一點で照射した意味が浮かび上る。方外者として激しく拒否しながら、にもかかわらずそこで生きることを強いられる現實、その壓倒的な現實の前で自己は慟哭するしかない、という阮籍の原點に歸つて激しく共有した。そしてその共有を可能ならしむるものが、二元論を生きる延之の内なる現實——荒れすさんだ心であつたのである。

ここで延之が自身を「狂」と規定した挿話を想起したい。心を許した長年の友人何尚之との戯れ半分に交した、『南史』本傳の傳える話である。

(文) 帝嘗問以諸子才能。延之曰、竣得臣筆、測得臣文、  
臧得臣義、躍得臣酒。何尚之嘲曰、誰得卿狂。答曰、其  
狂不可及。

文・筆・義・酒と自己を語りながら、狂こそが自己の本質であり、息子の誰もが及ばないとする物言いは、機知に富むその場限りの一挿話以上のものを示してはいないか。後に王僧達が司馬相如の「文府」と魯仲連の「道心」とを引合いに稱えた(答顔延年)文・筆・義の何れにも自己の存在を託そうとはしない。酒を含めた数々の奇行に奔らざるを得ない内面の鬱積と緊張とをも暗示させる「狂」を、存在の本質として提示しているのである。それは、複合的・二元論をしかも負い目を持つて生きる複雑な内面がかいま見せた本音ではなかつたか。荒れすさんだ心や苛立ちの讀みとれる詩句が皆無ではない。しかし「狂」なる自己規定へ驅り立てることほど、延之の内なる現實を端的に示す事實はない。そしてそこにこそ阮籍受容の顔延之的意味があつたのである。「狂」なる自己規定によって辛うじて自己を確認する延之を支えていた存在、それが阮籍であつたと言つてよいであらう。

#### 四

顔延之の阮籍受容が延之の存在とその本質で深く関わつていたとして、しかし今のわれわれから見れば阮籍との差はあまりに大きく、思想と文學に於いて決定的な限界がある。延之には阮籍のような思想的な自己回復の試み(試み)がない。また、その存在の抱えていた難しさを屈折して表現化し得た「詠懷詩」のごとき作品群はない。志とは終始先驗的なそれに組みこまれるものでしかなく、よりどころとする「狂」なる自己規定を感傷的に一步も譲らぬという限界がある。その限界を踏まえた上で、だがやはり、表現としての生身の生と内なる現實とに延之の存在の獨自性を認めねばならない。さらに阮籍受容に示されたその獨自性こそ、文學史の上で重要な位置を占めていると思われるのである。

今文學と現實との關係それ自體に文學史の視座を据えるとき、南朝文學の到達點は、梁の蕭綱(簡文帝)の「立身の道は文章と異なる。立身は先づは須らく謹重なるべし、文章は且くは須らく放蕩なるべし」(誠當陽公大心書)のごとき、文學と現實の二元論である。そういう固定的な二元論へひたすら傾斜してゆく文學の危機の中で、顔延之の存在意義は、過度の修辭技巧を代表する詩人という從來の裁斷にあるのではなく、そういう文學の危機を危機として生

きおとした表現としての生にあるのではないか。文學が現實との緊張を脱落させたまま自立する、その危機そのものに宮廷詩人として身をおきながら、しかもなおそういう自己に晩年に至るまで負い目を抱き續けた。その姿は誠實で、それなりに倫理的ですらあり、同時にすぐれて南朝文學の課題を背負つた存在であつた。文學の危機の流れに抗し「狂」なる存在を賭して辛うじて佇む延之の存在の意味を考えるとき、それとは全く對照的な江淹の姿が想起される。建平王劉景素への思いを斷ち切られた挫折の結果、文學と現實の差に居直ることによって「才盡く」とまで貶められた江淹の晩年と比較するなら、その乖離に居直れず晩年に至つてますますこだわる延之の誠實な姿は、その誠實さそのものによつて時代に屹立していたと言える。しかしそれにしても、その誠實な姿がしかもなお喜劇的な様相を呈するのは、延之自身の限界もさることながら、王僧達の評價に示されるごとく、そこにこそ延之的存在を雅なるものとして認めていく皮肉な時代の陥穽があつたからである。それがとりもなおさず、壓倒的に押し寄せる文學の危機の流れに他ならなかつた、とも言えるであろう。

(東京工業高等専門學校助教役)

△注▽

- ① 志にも現實の生が志向した志もあるが、王僧達がいう志とは、雅なる人が持つ先驗的な志という意味合いが強い。従つて、志すなわち文學(雅なるもの)として一應把握しておいてよいのではないか。勿論その場合の文學とは、侍宴の作品群に代表される文學である。もつともそれらの關係が王僧達のいうほど單純でないことは本論で述べるところである。
- ② 陶淵明をはじめとして『宋書』隱逸傳中の王弘之や關康之との接觸、さらに自らもしばしば隱遁への傾きを表白する。それらが當時の好み以上の意味を持つのは、志に對する負い目を絶えず持ち續ける構造によると言える。
- ③ 繆鉞氏「顏延之年譜」(中國文化研究彙刊第八卷所收)による。
- ④ 拙稿「陶淵明と顏延之」(東書高校通信國語第一二九號)参照。
- ⑤ 「弱植慕端操、窘步懼先迷」(和謝靈運)という詩句もある。阮籍「壯士何慷慨、志欲威八荒」(詠懷詩其三十九)や陶淵明「少時壯且厲、撫劍獨行遊」(擬古其八)とかは一應おくとしても、延之と同じく「性褻傲」と評された若き謝靈運の、謝家をバックにした「性奢豪、車服鮮麗、衣裳器物、多改舊制、世共宗之、咸稱謝康樂也。」(宋書謝傳)と比べると面白い。
- ⑥ 「延之與陳郡謝靈運俱以辭采齊名、而遲速懸絕。文帝嘗各敕擬樂府北上篇、延之受詔便成、靈運久之乃就。」(南史顏傳)なお文帝の下での顔謝には、かつての劉義真への夢を追うような振舞いが目につく。従つて兩者ともそれだけ失望も幻滅も大きい。

いのである。

- ⑦ 故高橋和巳氏「顔延之の文學」(立命館文學第一八〇號、のちに作品集9所收)参照。

- ⑧ 木全德雄氏「顔延之の生涯と思想」(日本中國學會報第十五集)参照。

- ⑨ 竹林の七賢について戴逵は「……竹林爲放、有疾而爲顰者也。」(晉書隱逸傳)という。その他王隱の『晉書』には、孫登のことに關してであるが、「魏晉去就、易生嫌疑、貴賤並沒、故(孫)登或默也」(世說新語棲逸篇注引)という理解を示す言い方もある。

- ⑩ 鍾嶸「頗多感慨之詞、厥旨淵放、歸趣難求。」(詩品上品)李善「嗣宗身仕亂朝、常恐罹謗遇禍、因茲發詠。故每有憂生之嘆。雖志在刺譏、而文多隱避。」(文選詠懷詩注)

- ⑪ 沈約は、「山濤・王戎以貴顯被黜」とする(宋書顏傳)。むしろ、他の五君と比べ兩者には背後の現實故の苦しさと激しさが缺けている、と延之はみなしたのではないだろうか。

- ⑫ 明の胡應麟のように、阮籍と顔延之の「識遠」は嵇康や謝靈運の及ぶところでない(詩數)、とする人もいる。

- ⑬ 「晉文王(司馬昭)稱阮嗣宗至慎。每與之言、言皆玄遠、未嘗臧否人物。」(世說新語德行篇)劉孝標注に引く李康の「家誠」では、「每與之言、言及玄遠、而未嘗評論時事、臧否人物。可謂至慎乎」とある。人物だけでなく時事をも論評しなかつた點、注意を要する。

- ⑭ 「阮宣子(脩)有令聞。太尉王夷甫(衍)見而問曰、老莊與聖教同異。對曰、將無同。太尉善其言、辟之爲掾。世謂三語掾。」

(世說新語文學篇)この話もこういう應待を風流として受けとめていく風潮を示す。なおこの話、『晉書』阮瞻傳には、阮瞻の答えに王戎が感歎した話とする。もしそうであるなら、王戎に於いてすでに嵇康的な意味を缺落させた思想の風化があつたことになる。

- ⑮ 阮籍の思想的格闘については、福永光司氏「阮籍における懼れと慰め」(東方學報第二十八冊)参照。延之には「慰め」がないのが決定的な差異だと言えよう。

- ⑯ 拙稿「江淹の挫折——建安吳興の令左遷をめぐって——」(東京工業高等専門學校研究報告書第6號)参照。